



恒彦はハッキリと見た。

仰臥した殉の手首の辺りが急激に変色しドス黒い痣が浮かび上がってくるのを。
剛力で握り締められたように、痣は指の一本々々まではっきり判る人の手の形をしていた。

「これは…」

はふうっ

反りかえった殉が、肺の空気を吐き出す音を口から漏らすとバツタリとベットに沈み動かなくなる。

ガタンッ！

前のめりに倒れ込んだ加夏子が車椅子から床へと崩れ落ちた。

「カナちゃん！」

紗季子が血相を変えて加夏子を抱き起こす。

「あなた！ カナちゃんが、カナちゃんが！！」

恒彦は殉の脇から飛び降り娘のそばへ駆け寄った。
彼女の右手は何かを握った形のまま硬直している。

「息をしてないぞ」

「そんな…どうすれば…カナちゃああんっ！！」

「落ち着け！人工呼吸…心臓マッサージ…とにかく何でもやるんだ！ お前は救急車を早くっ！！」

言うなり恒彦は、紗季子の腕の中から加夏子をひっぺがし、床に横たえるとマウスツーマウスで人工呼吸を始めた。
吹き込む。離す。また息を吹き込む。

チラリと横目で見上げると、狼狽しきった紗季子は呆然と立ち尽くしていた。

「電話だサキィィー！！！」

恒彦の、家をも揺るがす大喝に我を取り戻した紗季子は、狭い階段を駆け降りた。
和服の裾が足に絡まり、転んだ紗季子は数段を残して階段を真っ逆さまに落ちてしまった。

◇

短い間だが、気絶していたようだ。
紗季子は壁に手をつけて起きあがろうとした。
頭が酷く痛む。額に手を当てると真っ赤に染まっていた。
転落した時ぶついたらしい。

ピンポーン

間抜けなドアチャイムの音。

紗季子はヨロリと立ち上がった。

鉄芯を脳天から打ち込まれるような痛みに唇を噛んで堪えながら、フラフラと玄関へ向かい鍵を開ける。

銀さんが立っていた。

右手にAEDを、左肩には救急キットのバッグを下げた銀さんは目を見開いて目の前の女を見つめた。

「サキ。おまえ」

「くが…さん…カナが…」

すっと倒れ込む紗季子の小柄な身体を、銀さんの太い腕がガッシリと支えた。

「おい！ しっかりしろ！ 二人はどこだ？！」

「…かい…二階に…息、してないの…お願い…はやく…」

銀さんは物も言わず、紗季子を横抱きにすると階段を駆け登った。

「久我さん？ どうして…」

顔を朱に染めた妻と、それを脇に抱えて部屋に入ってきた男の姿に当惑した恒彦の動きが止まった。

「説明は後で、清水さん。手を止めないで」

加夏子の足下に紗季子をそっと降ろすと、銀さんは手早く傷の状態を確かめた。

「大丈夫だ、瘤の上が切れてるから派手に血が出たが。ここを抑えて」

救急キットから取り出した止血帯で頭の半分を覆うと、紗季子の手をとって傷口の辺りに添えさせる。虚ろな眼差しを向けた紗季子は、されるがままに頭を抑えた。

「そっちはどうですか？」

「駄目だ、呼吸が戻らん」

「これを」

AEDの箱を開き電極を取り出す。

「服を脱がせて。胸と脇腹に電極を貼るんです、箱の裏に絵があるからその通りにして下さい」

「わかった」

加夏子を恒彦に任せ、銀さんは殉の状態を確認した。

「こっちもバイタルが弱い。お嬢の状態と一緒だ。いや、同調しているんだろう」

「同調？」

「この有様なら、多分。あの時もそうだった」

「それじゃあ、二人は今」

「蘇生を急ぎましょう。恐らくお嬢のバイタルに彼も引きずられている。ボタンを押して」

恒彦がAEDのスイッチを入れる。

女性のアナウンスが合成音声で流れ、高電圧のチャージが始まる。

「離れて！ 清水さん」

恒彦が加夏子の脇から離れた。

紗季子は横になったまま眺めている。

チャージ音が高まった。

いっかいめのせせいです

ドンッ！

加夏子と殉の身体が同時に跳ね上がった。

じょうたいをみています

そのままでおまちください

穏やかだが暖かみの無い合成音声が、蘇生状態を診断中だと告げた。

恒彦も紗季子も、銀さんも固唾を飲んで結果を待った。

加夏子、しっかりしろ

カナちゃん

帰ってこい、二人とも

三人の願いをよそに、再びチャージ音が低く鳴り始める。

銀さんは立ち上がると、ベットに横たわった殉の上から覆いかぶさり叩きつけるように言った。

「連れてこい！ 引っ張りあげろ！ お前なら出来る筈だ！ お嬢と一緒に帰ってこいっ！！」

にかいめのそせいです

ドンッ！！

その時、跳ね上がった殉がクワッと目を見開いた。

あ…あ…

ブルブルと震える殉の腕が、天井に向かって持ち上がる。瞳孔は激しく拡大と収縮を繰り返していた。

「どうした？ 俺が判るか？！ おい、しっかりしろ！！」

銀さんは懸命に話しかけた。
殉の腕が限界まで伸ばされる。

銀さんは見た。
腕についた痣がグニャリとへこむのを。
その時何故、加夏子の方を振り向いたのか彼自身にも判らなかった。
鉤型に硬直していた加夏子の手が瞬間、こぶしとなって握り締められた。

がはあっ！！

吐き出すような呼吸音と共に、殉がもの凄い勢いで腕を引き降ろした。肘が手首の近くまで深々とベッドにめり込む。

…

……ピン…

……ピン、ピン…

……ピン、ピン、ピン、ピン…

AEDの電子音が、規則正しく心拍をモニターし始めた。

でんきよくをはずしてください
でんきよくをはずしてください
でんきよくを…

加夏子の脇に屈み込んで電極を外した銀さんは、ゆっくりとAEDのスイッチを切った。

「やった…のか？」
「判りません、まだ」

恒彦の問いに、彼もそう答えるしかなかった。

後ろで誰かが動く気配がして振り返った恒彦は、物憂げに身体を起こす少年の姿に思わず声をあげた。

「きみっ！ 大丈夫なのか？！」

紗季子も銀さんも吊られてベッドの方を見る。

「…なん、とか…カナちゃんは？」

う、うう～ん

小さく唸った加夏子が目を開く。

「カナ！ パパだよ、判るか！？」

「ここ…わたしの…部屋…だよね？」

「そうだ！ そうだよ！！ どこか痛くないか？ 寒くないか？ もう大丈夫だからなあ！！」

ガッシリと抱きしめられ何度も何度も身体をゆさぶられながら、加夏子は父親の肩越しにベッドの殉を見ていた。

「おかえり、カナちゃん。悪い夢は終わったよ」

「じゅん」

大粒の涙が、後から後から溢れ出て加夏子の頬を、恒彦の肩を濡らしていた。

「やったのか、坊や？」

銀さんの言葉に、殉は晴れ晴れとした笑顔で返した。

「ええ、たぶん」

「多分だあ？ そのわりにヤスッキリした顔してるじゃねえか」

緊張から解かれ、銀さんもいつもの口調に戻っていた。

見えぬ目で加夏子を見る。

彼女も照れたように微笑み返した。

夜が、明けようとしていた。

◇

「さあ、いこうか」

器具をまとめた銀さんが声をかけた。

加夏子を車椅子に座らせていた恒彦が、ベッドの脇に戻ると殉に手を貸し立ち上がらせる。

「僕は大丈夫ですから、加夏子さんについててあげてください」

渡された杖を抱え、左手で壁を探りながらドアの方へと歩く。

「下で待ってて、ジュン」

「うん、待ってる」

紗季子がフラリとついてゆく。

「お二人に何か飲み物でも出してやってくれ、わたしも喉がカラカラだ。階段に気をつけてなあ！」

簡易エスカレーターの固定器具を解く恒彦の声は弾んでいた。

ソファに殉を座らせた銀さんは、思い詰めたような目でジッとこちらを見つめている紗季子に気づいた。

「どうしたサ…清水さん、何かありましたか？」

「……」

「あの…清水…さん…？」

物もいわず紗季子が銀さんの胸に飛び込んできた。

「来てくれたんだ！ あの子が危なくなったらちゃんと…待ってた、アタシ待ってたんだよお！！」

銀さんのぶ厚い胸板にむしゃぶりつき、何度も顔を擦りつける。

「ちょっと！ おい、どうしたんだ？ よせったら、離れて…離れろよ！」

「またアタシを置いてっちゃうの？ イヤだ！ 連れてってよ、アタシとあの子も一緒に連れてって！！」

「バカ！」

バンッ！

紗季子の頬が鳴った。

「アタマ打って混乱してるんだ。目えさせ！ ここはお前の家で、ダンナもいて、あの子はダンナとお前の子じゃないか！ しっかりしろ！！」

え…

だってあたし…

アンタがいなくなって…

けっこうん…ムスメ…あのヒト…

「戻るぞ、長いは無用だ」

「銀さん」

「ナンも言うな！ ほら立て」

モーター音がして、恒彦達が二階から降りてくる気配がした。

「悪いが失礼します！ 今夜の事はまた後日に、じゃあ！！」

狗を引きずるように玄関を飛び出した銀さんは、停めてあったワゴンに彼を押し込むと脱兎のように運転席へ駆け込みキーを回した。

「ジュン！」

「ゴメン、病院で待ってる！ まってるから！！」

玄関から聞こえてきた加夏子の声に大声で答えた途端、狗は座席に背中を抑えつけられた。派手な音を立てて急発進したワゴンは、夜明けの町並みの中みるみる遠ざかっていった。